様式２　【生活様式などの無形のもの】

ふくしまの森林文化調査カード

県 HP公開（可・否）

区分	1.森づくり　2.森の恵み　3.森と技 4.森と暮らし　5.森の文化財　6.森の風景	
分野（ふりがな）	（分野） 山仕事	（ふりがな） やましごと
地域独特の呼び方	―	―
タイトル	山　師	
伝承地域	古殿町	
由来	（いつ、どこで、誰によって起こり、どのようにして現在まで（いつまで）伝えられてきたか） 山師は山林の立木を売買する人で、製材所の社員であったり、自分で買って転売したりすることを仕事とした。	
内容	（内容と共に、行事・祭りの場合は実施の時期、郷土料理の場合レシピなども） 山師は、立木を売りたいと考えている山林の所有者を訪ね、交渉により立木を買い取る。現場となる山へ出かけ、立木の種類、年数、生育状況、数量等から買値をはじき出し交渉をする。判断を見誤ると損をすることもある。一種の投機的な面もあるため、売買を生業とし、投機的性質の仕事をする人を、山に関係なくとも山師と言うようになった。	
文化財等の指定状況	―	
問い合わせ先	古殿町教育委員会　電話０２５７－５３－３１１１	

【継承活動を行っている方がいる場合】

個人	氏名（ふりがな）		※顔写真がありましたら、コピーか電子ファイルをご恵与願います。（貼り付けずに、名前がわかるようにして同封ください。）
	性別・年齢 生年月日	男　・　女　　歳 明治・大正・昭和・平成　　年　　月　　日　生	
	住所・電話	〒　電話	
	職　　業		
団体	団体名（ふりがな）		
	代表者氏名（ふりがな）		
	団体の設立年月日	明治・大正・昭和・平成　　年　　月　　日	
	問い合わせ先	電話	

【フリーフォーマット】

キーワード

佐藤光次さん

輪尺

古殿町大作に住む佐藤光次さん(昭和4年生れ写真左)に、「山師」の仕事について聞きました。佐藤さんは、31歳の時（昭和35年）に知人の紹介で町内の製材所に勤め始め、いわゆる山師と呼ばれる立木の買付けを任され、退職するまでその道一筋だった。素人同然の入社であったため、1年間は自分なりに工夫をしながら勉強した。当時の古殿町には11軒の製材所があり、山林を買付けるにも過当競争だった。バイクで何処へでも出かけ、年間5万km乗った。近隣の町村は勿論のこと、北茨城や会津へも行った。売買の交渉が成立すると現地調査を行い、1本1本の立木の大きさを測り買値をはじき出した。木の直径は、輪尺(りんじゃく・写真右)で測った。昭和35年当時は、石(こく)で材積を出しており(1㎥は3石6斗)、1石1,800円～2,000円位の買値だった。4,000円～5,000円位が一番長く続いたが、昭和47年には買値が一気に跳ね上がり、1石12,000円位になった。現地調査で厄介なのは、どれだけ良質な材が取れるかを判断することだった。立木の中までは見えないため、製材してみて分かることがある。この山から役物（欄間や長押等）が何割取れるかを常に念頭に置くが、見極めるのはなかなか難しい。同じ山で育った杉でも斜面によって材質や木味が違う。また、土壌が良いと良質の材木が取れる。土壌が良い山の杉は、木口(断面)が何とも言えない赤味を帯び艶がある。外観で赤味の具合が読み取れるまでに、3年かかった。仕事をするうえで一番大切なことは、情報をいかに早くつかむかだ。「身内に縁談がある、自宅を新築する」などで立木を売りたいという情報を他の買付人よりも早く得ることだ。また、常に相場を見ることも大切で、将来、値が上がるのか下がるのかを判断し、買付け量を増やしたり減らしたりした。買付けに行った時に家庭の状況を推測することも大切だ。「洗濯物がきちっと干してある、玄関にある靴はつま先が入口を向き、揃えてある」等の家は手ごわい。こういう家は、細かい計算書を出さないと買付けはうまくいかない。靴がバラバラ脱いであるような家庭は、大雑把な見積書でも買付けが出来た。

一番思い出に残る交渉は、石川町の旧家の立木を買った時だ。7反歩の山の立木300本全ての樹齢が170年あり、近郷近在の多くの製材所から注目が集まった。売主が高校生の時に野球選手の経験があったため、あいさつに行くと野球の話ばかりだった。佐藤さんは、知人に野球について詳しく聞き、野球の会話ができるようにした。この甲斐あって買付けができ、会社に大いに貢献できた。

佐藤さんは、勤務した23年間、一度も損をしたことはなかった。もうけ過ぎず、ほどほどの値段で買ったので売主に信頼されたからだと思う、と語ってくれた。(平成25年12月11日)